共に未来を育てるために

進路指導の現場から

第3回

狭くなりがちな高校生の視野を広げるような指導をしています

北海道札幌手稲高校　進路指導部長
清澤　哲生

きよさわてつお●教職歴28年。専門教科は地歴。同校に赴任して8年目。2014年より現職。「教育は人なり」を信条に、指導にあたる。

生徒の視野を広げる「キャリア探究スキル」

――進路指導の方針について教えていただけますか。

進路指導の目的は、生徒の希望進路実現ですから、入学時の進学の意欲を持続させ、自ら学習に向かうような働きかけを行っています。

本校は1学年約320人の生徒が在籍していますが、例年120人程度の生徒が現役で国公立大に進学します。うち100人程度が道内の大学に進学しており、道外の国公立大に進む生徒は、20人ほどです。私立大進学に関しても同様の傾向があり、道外の私立大へ進む生徒は10人程度です。

進路希望調査は各学年2回、春と秋に行っていますが、1年生の段階では、どうしても狭い視野の中で選びがちです。中には入学直後から進学先だけではなく、将来の職業まで決めている生徒もいますが、保護者に言われたからという理由が多いようです。

そこで、1年次から「キャリア探究スキル」という、生徒のキャリア観を広げる取り組みを行うことにしました。

――具体的な内容について、教えていただけますか？

1年次は全員がインターンシップに参加します。事前に受検した職業適性検査の結果を参考にしながら、希望の職種を選択し、学校近隣の事業所で実習をさせます。

続く2年次では大学教員による模擬授業「学び体験ゼミ」を開講しています。これは大学での学びに触れて、興味のある学問への理解を深めることが目的で、生徒は17コースから1つを選び、ゼミ形式で4回連続の講義を受けます。

こうしたプログラムを経て視野を広げたうえで、2年次の秋から、具体的な進学先の検討をさせています。

面談を頻繁に実施して進路のミスマッチを防ぐ

――貴校の進路指導における特徴はどのような点ですか。

他校に比べて、面談の数が多いことが特徴でしょうか。進路指導部が定めた面談期間以外でも、担任は生徒に声をかけ、マメに話を聞いています。

面談の回数や、細かい内容は担任の裁量に任せていますが、生徒の考えを広げる指導を全員が意識しています。

――面談では具体的な大学の話をすることも多いと思います。高校を訪れる大学関係者から必要な情報は得られていますか。

本校にいらっしゃる大学の皆さんは、どなたも奨学金や新しい入試方式、そして道外の大学の方は、地方受験に関する話をよくされます。お金の話や入試方式の話題は、生徒・保護者共に関心の高い事項です。しかし、正直な話、どの大学もそれに大きな違いがあるようには見えません。

私たち教員がもっと知りたいのは、「この大学では具体的にどのような教育を行っているのか」「卒業生はどのような場で、どのように活躍しているのか」ということです。そして、それを、高校生でも理解しやすいシンプルな言葉で語っていただくと、教員は生徒に伝えやすくなります。

例えば、生徒から「大学で英語の勉強をしたい」と質問を受けたとします。英語の教員になりたいのか、英語力をきちんと身に付けて留学をめざしているのか、もしくは英文学を勉強したいかで、勧める大学は違ってきます。しかし、各大学の強みを、私たちが理解していないと生徒に適切な回答をすることができません。結果的に「英語教育に強いイメージがあって、かつ偏差値が高い大学」を勧めるしかなくなります。

私たちももっと大学について勉強すべきですが、一方で近年は学部の新設や再編成、名称変更が多く、新しい情報に追いつきにくい面もあることは理解していただきたいです。特に北海道の高校の多くは、本州の大学の情報を絶えず集めてはいません。もちろん、そのような情報に強い教員もいますが、それでも各校に1、2人程度しかいないのが実情です。

道外の私立大に進学するメリットを伝えてほしい

――生徒の進路選択に変化を感じることはありますか。

保護者の影響力が強くなっていると思います。保護者から「地元に残ってほしい」と言われれば、道内だけで進学先を考えてしまう生徒が本当に多いです。私個人としては、若いときに多様な経験をすることが大切だと思っています。首都圏に出れば、本物に触れる機会も持ちやすいでしょう。だから生徒には、できるだけ外に目を向けてほしいのです。

本校は入学段階から国公立大志望者が多いのですが、併願先として多くの生徒が私立大に出願しますし、進学する生徒も一定数います。ただ、道内の大学という少ない選択肢から選ぶため、特定の私立大学に集中しています。また、「なぜ、わざわざ東京の大学に行く必要があるの」という疑問を持っている生徒も少なからずいます。

だからこそ、道外の私立大学関係者は、「道外の私立大学で学ぶメリット」「その大学だからこそ実現できる将来」を、生徒や保護者、そして高校教員に、よりきちんと伝わる形でアピールするとよいのではないでしょうか。

まとめ

教員が知りたいのは教育の強みと大学卒業後の姿

それがシンプルな言葉でないと、生徒まで伝わらない

高校訪問 ワンポイントアドバイス

教員向けの話ではなく生徒向けのエピソードを

教員向けのかしこまった話よりも、生徒に伝えやすい具体的なエピソードをお聞きしたいです。また、教員は自分の目で大学を確かめたいと思っているはずです。北海道の教員の場合、首都圏の大学を訪れる機会は少ないのが実情です。数年に一度で構わないので、大学側が訪問するのではなく、地方の教員を大学に招く機会を設けていただけるとありがたいですね。

取材・文／本間学　撮影／高橋龍次